

文語の苑」第四回シンポジウム報告

加藤 淳平

平成二十六年十二月二十四日

我ら「文語の苑」、東洋大學竹村牧男學長初め、福川伸次理事長、中山尙夫文學部長の御支援を受け、平成二十三年より、毎年秋、同大學白山キャンパスにて、シンポジウムを開催し來たり。平成二十六年十一月九日、第四回シンポジウムを開催せるところ、その模様につき、下記の通り報告申し上げ。

「文語の苑」第四回シンポジウムの主題は、「明治以後の文語詩」なり。「文語の苑」は、愛甲代表幹事の主唱により、平成二十六年の中心活動テーマに文語詩を設定す。年初以來、「文語の苑 文語詩集」なる小冊子の編纂作業を續け、九月に印刷、完成せり。

第四回シンポジウムにては、元NHKエグゼクティブ・アナウンサー加賀美幸子氏の、「文語の苑 文語詩集」所載等の文語詩朗讀を中心に、「文語の苑」谷田貝、加藤、市川三幹事、それぞれ明治以後の文語詩につき、講演を行ひたり。

シンポジウムの冒頭、竹村牧男學長及び中山尙夫同大學文學部長の御挨拶を受く。

竹村學長、日本の佛教に特有の詩、和讃の傳統に言及せられ、その傳統を、明治以後に繼ぎたる東洋大學創立者、井上圓了の哲學和讃を紹介せらる。

シンポジウムは、以下の順にて進行す。

「新體詩」の誕生

谷田貝常夫

文語詩朗讀

加賀美幸子

日本の文化傳統と文語詩

加藤淳平

文語詩への回歸

市川浩

先づ「文語の苑」谷田貝幹事、明治初年より十年代の、「新體詩」、即ち新しき體の詩、の誕生の時代に、聽衆を誘ふ。「新體詩」の生まれたるは、大きくは、明治維新による革新機運と、歐米勢力に對抗せんがための西洋文化導入の背景の下、小さくは、明治初年より、翻譯刊行せられたるキリスト教讚美歌の影響下に於てなり。明治十五年に、東京帝國大學、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三教授の著したる「新體詩抄」刊行せらる。「新體詩抄」中、最も人口に膾炙せるは、「文語の苑 文語詩集」に採録せざるも、外山正一が歐米の軍歌に觸發せられ、作詞せる「拔刀隊の歌」なりき。「新體詩抄」の刊行せらるるや、文學界等の一部に、冷眼視する者あれど、廣く熱く、世に歡迎せられたり。谷田貝幹事、最後に、その情況につき、國木田獨歩の一文を引用して、講演を結べり。

次いで加賀美氏登壇し、「文語の苑 文語詩集」の最初なる、「新體詩抄」の「春夏秋冬」より、翻譯詩、森鷗外「ミニヨンの歌」、上田敏「春の朝」、永井荷風の「無題」等、次に北村透谷「雙蝶のわかれ」、島崎藤村「初戀」、「高樓」、與謝野晶子「そぞろごと」、「君死にたまふことなかれ」、北原白秋「落葉松」、室生犀星「小景異情」その二、佐藤春夫「少年の日」、中原中也「冬の長門峽」その他の文語詩を、若干の解説を交へ、朗讀なされたり。同氏は、NHKアナウンサー時代より、アナウンサー中の白眉にして、その朗讀には、「朗讀の加賀美」なる定評あり。當日の御朗讀、亦定評に背かず。過度の抑揚を避け、淡々と詩句を讀まるるも、それを聴く者、加賀美氏が聲の響きに、詩句への理解と共感の、自ら滲み出づるを感じ、魅了せらる。

次に加藤、「文語の苑 文語詩集」編纂者の立場より、明治以降の文語詩の、歴史的推移を概観す。明治以後の新體詩、当初は、翻譯詩等により、西歐の詩形、音律に學びつつも、日本の詩の傳統に則りて、徐々に、七五調の音律を多く用ゐる定型詩の詩形、確立せり。大正期頃より、口語詩を選好する詩人多く出で、文語詩と口語詩、暫時併存すれど、昭和の敗戦後は、文語の廢絶せらるるにより、文語詩ほぼ消滅し、詩は口語にて書かるるものとなる。作詩容易なる口語詩は、學童初め、多くの人作詩すれど、吟誦性缺くれば、記憶に残る詩尠し。之に對し文語詩は、吟誦と記憶容易なり。そは、明治以後の文語詩に、日本古來の和歌と漢詩の傳統、脈々と、敗戦後の歌謠曲までも、流入し來たり居ればなるべく、我そを強調す。

最後に市川幹事、口語詩より詩作を始めた萩原朔太郎、宮澤賢治等の、口語詩より文語詩に移行せるを論ず。朔太郎が詩作の到達點たる文語詩集、「氷島」の「氷島の詩語について」に、日常口語の、「心の絶叫」を表すに不適當なる理由、三點を擧ぐ。「ネバネバした蜘蛛の巣のからみつく」如き文體、否定・肯定決定の文尾にあるによる意志推定の困難、促音と拗音に富む漢語利用少きための感覺的に強き表現の缺如、是なり。朔太郎、新しき日本語發見のため、「絶望的に悶え悩んだあげくの果て、遂に古き日本語の文章語に歸る」までの、凄絶なる道程を歩む。そは、日本への回歸の試みなれど、戦爭眞最中の渠が死は、この道程を中斷せしむ。今日の國語は、朔太郎の指摘せる訣陷を、更に深刻化す。されば市川幹事、朔太郎の如き、或いは膨大なる口語詩稿を、生涯の最後に、文語詩に凝縮し、完成せしめんとしたる宮澤賢治の如き、國語表現高度化、精緻化の努力の、現下の國語に必須なるを、餘韻として示唆し、講演を結べり。

以上のシンポジウムの意義を求めんとせば、第一に、明治以後の文語詩の、当初は歐米の詩形、詩精神に學びたるも、日本の古典として確立せるを確認し、第二に、今の、尙不十分にして、未完成なる國語口語表現の、高度化、精緻化の方向を示唆す、是なり

と云ふ可きに非ずや。萩原朔太郎に據りて、市川幹事の示唆せる下記三點、我らが今後の活動にとりて、有益ならむ。

①「ネバネバした」文體の對極に立てる、乾きたる文體の創出

②語頭にありて、文尾の打消しを豫想せしむる語句の肯定文への使用嚴禁

③漢語の多用

最後に愛甲代表幹事、「文語の苑」として、竹村學長、中山文學部長を始め、東洋大學及び加賀美幸子氏への謝辭を述べるとともに、「文語の苑」の精神的指導者にして、去る十月二十六日に世を去りし岡崎久彦氏に對し、深甚なる弔意を表せり。